
涼宮ハルヒ×涼宮ハルヒコの暴走

能美裕哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒ×涼宮ハルヒコの暴走

【Nコード】

N5113G

【作者名】

能美裕哉

【あらすじ】

「なんかねーかなー……」「なんかないかしら……」「この二つの言葉が重なった瞬間、また始まってしまった非日常。誰か戻してくれ！涼宮ハルヒコの憂鬱の続編です。 第七話最新！

プロローグ：（前書き）

涼宮ハルヒコの憂鬱の続編です。

プロローグ：（後書き）

何が始まるのでしょうか？次回をお楽しみに

くそ、今は部屋には何故か誰もいないし……
せめて長門がいれば……
すると

コンコン

誰かが来たみたいだ。

俺はドアへ向かい、ドアを開けると……
そこには、

北高の制服をきたポニーテールの少女がいた。

第一話・異変：（後書き）

やっちゃんいました・・・

第二話・会ってしまった：
(前書き)

遂に！

第二話：会ってしまった：

私は授業が終わってモヤモヤした気持ちのまま今文芸部室兼S O S 団本部へと足を進めていた。

だって同じクラスにいたはずの奴の性転換バージョンが向かい側の教室にいるといういかにも非現実なことが起こっているからだ。

しかもハルヒコを女にしたみたいな人を見た瞬間更に私の不安は増していった。

だってその人はハルヒコと同じように黄色いカチューシャをしていて、しかも腕には『団長』と書いてある腕章をしているのだ。

あ、でもこっちの人のカチューシャにはリボンが付いていたな。

……………そんなことはどうでもいい！

と、いうことは自分の性転換バージョンがいるということか！？
そうだな！？

……………いつも谷口や国木田に言われている「もっと女の子らしくしなよ。せつかくの美貌が台無しよ」とかいう言葉はどうでもいい！
私は顔をすごいことにしながら廊下をドスドスンと歩く。

ちよつと深呼吸をして落ち着こうか。

さすがに私も平静を保たないとダメだ。

部室に行つて長門にでも聞かなくては。

私はそう意見を固めた。

……………よし、落ち着いてきた。

私はスタスタとまた歩き出す。

そして部室前に到着。

……………よし、

開けるぞ！！！！

……………つとその前に朝比奈先輩が着替えていたらいけない。まずはノックだ。うん、そうだノックだノック。

コンコン

さっきやったはずの深呼吸の意味もなかったようにまた動悸が激しくなる。

手は震えている。

落ち着くんだ、落ち着くんだ自分！

ガチャリ

ドアが開いて部屋の中にいたのは…

北高の制服を着た見るからに普通の男子だった。

「……………」
「……………」

その人は私を部屋に入れて、いつも私が座ってる席に座った
私はしょうがなくいつも古泉が座っている席に座った。

気まずい。

私はこの空気をなんとかしようとして口を開けた。

「あの」

「あの」

あ、

「さ、先にどうぞ」

「さ、先にどうぞ」

また

「いえいえ先にどうぞ」

「いえいえ先にどうぞ」

ハモリ過ぎだ！

「……………」

「えと、では、その…」

私は相手に話を続けるゆうに受け流した。

「……………」と、言うことは……」

「私達って……」

「「同じことをしているいてお互いがお互いの性転換バージョンということ!?!」」

二人して同じことを絶叫してしまった。

話してみると同じ時に同じように同じことが起きているらしい。

例えば北高祭の時にハルヒコがエノツズに入ってライブをしたこともあの人の方ではハルヒコの性転換バージョンのハルヒという人がライブをしていたということだ
しかもあつちはなんとバニーだ。

……………あの時ハルヒコを止めて良かった。

さすがにハルヒコをバニーでやらせるのはヤバい。かなり。

そう自分を誉めていると

ガチャリ

私達はドアを目を向ける。

そこには

朝比奈先輩と朝比奈先輩を性転換にしたみたいな美少女がいた。

第二話：会ってしまった：（後書き）

なんとやっちゃいました。

あと嬉しいお知らせ

せが一つ！

なんとアクセスが『暴走』では30

00を越えました！『暴走』の前日話の『憂鬱』では4800にな
つてしまいました！二つを合わせるとなんと約7800になつてし
まいました！

こここここここれは夢じゃないで
すよね？ 私にこんなにも喜びと私の尊敬する作家様の一人の谷
川流様と私に性転換バージョンを教えてください！ 動の性転換
劇場を出してください！ 感謝です！！ これからも駄文です
が見捨てずに読んで下さい！ 出来れば感想とかメッセージとか下さ
るとかなり喜びます。叫びます。「嬉しいぜコノヤロウー！」（こ
れは事実です）

第三話：顔合わせ：（前書き）

ちなみにハルヒコはハルヒ子ではありません。無理やり漢字変換するなら『晴彦』や『春彦』になります。作者は最初そういう風に間違えてかなり頭の中で悩みました。あと、『シヨタ』とは『ロリ』の対義語で、幼い男の子という意味です。

第三話：顔合わせ：

「えと、え？え？え？ええええええええええ！？」

朝比奈さんはこの部屋の光景を相当驚いたらしく、大声をあげた。

朝比奈さんらしくないが、たぶんこれは正当反応だ。

朝比奈さんの隣にいる朝比奈さんにそっくりな、なんとも言えないシヨタな人は大声を出せずに口をパクパクしている。

でも俺はあまり驚かなかった。

朝からこういう目に会っているのだから。

朝比奈さんがこういう風になっているのは未来からどういう風になつていたかわかるからだろうか。

いや、ハルヒが空間の歪みを作ってしまったから見えないのか？

……………あゝあゝ！っ！わかんなくなつてきやがった！

こういうことは「禁則事項」だから教えてもらえないし…クソッ！

まあこのことは置いておこう。

頭の中がグチャグチャになりやがるからな。

「え、これは、その…」

またも八毛る。

なんでこんなに八毛るんだ？

……………もしかして、性転換バージョンだから男女が変わっただけで、思考回路は全く同じだったりするののか？

試しに、俺は向かい側にいる人に手を振ってみた。

結果、

相手は俺がやると同時に同じように手を振ったのだ。

ははははは…

俺が苦笑いすると相手も同時に同じように苦笑いした。

俺の予想は当たってる、ということだな。

「あのう…キョン子ちゃん達、何しているんですか？」

そう言ったのは朝比奈さんの隣にいる人だ。

うわ、声までシヨタだな…。

「気にしないで下さい、朝比奈先輩。ただのゲームですよ」

「………どういうゲームですか？」

「大丈夫ですよ。大したルールはありませんから」

俺の必死のフオロー。

ちよつと無理やり過ぎたかもしれんが、朝比奈先輩と呼ばれる人は
そうですか、と言って気にしていないみたいだ。

「………は、入って下さいよ。いつまでドアの前で立っているんです
か」

俺はそう言った。

その後、長門が来た。

あ、ちなみにダブル朝比奈さんはさつき交代で部室で着替えて、
今は執事服とメイド服だ。

もちろん二人が着替えている時は廊下待機だ。

「これは、涼宮ハルヒと涼宮ハルヒコによる」

もちろん長門も性転換バージョンと一緒にだった。

「そのため、涼宮ハルヒコは涼宮ハルヒという性転換人物、朝比奈
みつるは朝比奈みくるという性転換人物、古泉一姫は古泉一樹とい
う性転換人物、僕、長門有紀は長門有希という性転換人物がいる。」

「こつちではキョンと呼ばれていても性転換されるとキョン子とい
うあだ名になる。」

『子』を付け足しただけじゃねーか。

やっぱり全てはダブルハルヒの思惑か。

でもきつかけは俺なんだよな。

うわ、複雑な気分。

いつもハルヒは俺の言葉なんてロクに聞かないクセにこういう時に限って聞くから面倒くさいんだよな…

いつも巻き込まれるが、今回はいつも以上に難題そうだな。

「で、長門。どうすれば戻る？」

キヨン子が言った。

なんか『キヨン子』って自分で言うの嫌だな…。

「涼宮ハルヒと涼宮ハルヒコをもとに戻りたいとまず思わせなければならぬ。」

まあ、確かにそうだな。

と、いう訳で『涼宮ハルヒ及び涼宮ハルヒコをもとの世界に戻りたくなるようにしよう作戦』は決行された。

第三話：顔合わせ：（後書き）

まだ主役が出てませんね…。これは作者の気紛れと考えて下さい。もうすぐ出ると思います。なんと1日で600アクセスを超える日がありました！信じられません。ありがとうございます！もしかしたら5000アクセスを超えたら番外編書くかもしれません。ですが予定は未定です。作者は気紛れですよ。これからも読んで下さいね！ここまで読んでくださってありがとうございます！

番外編PART1：キヨソ子の動悸その1：（前書き）

予告通り番外編書きました！文章が長くなるので分けました。

番外編PART1：キヨンジの動悸その1：

作者

「と、いうことで！<暴走編>番外編シリーズ第一回を始めたいと思います！さあ拍手！」

キヨンジ

「何が』と、いうことで！』！？全然意味が通ってないんだけど」

作者

「よく聞いてくれたじゃないか！キヨンちゃんに1ポイント！」

キヨンジ

「別に鶴屋先輩の口調で言われても嬉しくないんだけど。っていうか声まで忠実に再現する必要ないし」

作者

「いやいや、それほどでも」

キヨンジ

「褒めてないし。うれしそうに手で頭を掻くな！」

作者

「なんだよ。つまんねーやつー」

キヨンジ

「つまらなくて結構。っていうかなんであんまり本編進めてないくせに番外編書くわけ？こんなことしてる暇あったらさっさと本編進めやがれ。」

作者

「進めやがれなんて下品な言葉やめよう。そんなこと言ったら何？そんなにハルヒコに会いたい訳？だったら大丈夫！この番外編でハルヒコ出すから！」

キヨンジ

「別にハルヒコに会いたい訳じゃないし」

作者

「キヨン子達の毎日ってあんまり知られてないと思うんだよ。だからそれを番外編で書いてしまおう！ってこと。前に5000アクセス超えたら番外編書くって宣言しちゃったし丁度いいじゃん！」
キヨン子

「って無視かよ！」

作者

「だから雑談はこころ辺でやめて、番外編いきますか！」

キヨン子

「やれやれ、どうなることやら・・・」

作者

「キヨン子行つたから言うけど、今回の番外編はとにかくキヨン子をドキドキさせようと思います！ではどうぞお楽しみください！」

<キヨン子の動悸〜朝比奈みつる編〜>

「全員集まつたな？・・・それでは、ただいまよりSOS団の市内の怪しい物探しを始めます！」

ここは、よく市内に散策に出かける時に使う喫茶店。

もちろん、ここで頼んだものは全て私の奢りになる。最後に待ち合わせ場所に着いたからだ。トホホ。

「じゃあ、まずこのクジを引いてグループ分けだ！」

ハルヒコは片手に五つのクジを握り「ほら、引け！」と言った。

私がクジを引くと、それは先の部分が赤くなっていた。

「あ、同じだ」

朝比奈先輩が、横でそう言った。

「そ、そうですか」

私は半ば嬉しくなりながらばれないようにそう言った。

「じゃあ、今回は俺と有紀と古泉さんのグループとみつるとキヨンのグループな。午後二時にまたここに集合。いいか！デートじゃないんだからな！」

ハルヒコはそう言っつて喫茶店を出て行つた。

「では朝比奈先輩。私たちも行きますか。」

「はい。」

朝比奈先輩は薄っすら笑いながらそう言つた。

「無いですね……」

朝比奈先輩はそうもらした。

「そんな簡単に見つかるわけないじゃないですか」

「それもそうですね。」

朝比奈先輩はそう言っつて微笑んだ。

うあゝ……和む……

やはり朝比奈先輩の笑顔は和む。

天使の微笑だ。

「久しぶりですね。前にもキヨン子ちゃんと一緒にやりましたよね」

「そのときは爆弾発言されましたけどね」

私はそう言っつて苦笑した。

「あはは……それもそうですね」

朝比奈先輩も合わせて苦笑した。

「あれからいろいろなことがありましたね。」

「そうですね……今思えば懐かしいです」

そう言っつて朝比奈先輩は目を細めた。

「これからも、ふつつかものですが、よろしく願ひします。」

朝比奈先輩はそう言っつてお辞儀をした。

「こゝ、こちらこそ……」

私もお辞儀をした。
そのとき、
ドンッ

私に誰かがあたってしまい、よろけてしまった。
私は思わず目を瞑った。

でもいつまでたっても地面の感触はしなかった。

「キョン子ちゃん？大丈夫ですか？」

目を開けるとそこには朝比奈先輩の顔がドアップだった。

背中には温かな体温が伝わる。

ん？体温？

。。。。。

「わわわっ！す、すいません！」

私は朝比奈先輩から離れた。

ななな・・・なんて恥ずかしいことを！

ただただ・・・朝比奈先輩に抱かれていたなんて！

予想できなかった出来事に私の鼓動は早くなった。

「いえいえ。僕はいいんですよ。キョン子ちゃんは大丈夫ですか？」

朝比奈先輩は心配そうに私を見る。

その顔を見た瞬間、私の鼓動は更に早くなり、顔は熱くなっていった。

「わわ・・・そんなに顔を赤くして！そんなに痛かったんですね！
？ど、どうしよう・・・」

朝比奈先輩はおろおろと慌てた。

私は、それからハルヒコにケータイに電話がかかるまでなんだか
上の空だった。

背中には、朝比奈先輩の体温がまだ残っていた。

<キョン子の動悸〜長門有紀編〜>

「遅い！」

ハルヒコにそう怒鳴られ、私は「ごめん」と言った。

「はい！次！引け！」

ハルヒコにそう言われ、クジを引いた。

「じゃあ、つぎは俺とみつると古泉さん、有紀とキヨ子な。次は三時二十分集合だからな。今度は遅れるなよ！」

ハルヒコはそう言ってスタスタ歩いてった。

「・・・な、長門？い、行くよ・・・？」

「わかった」

そう言っつて長門は歩き始めた。

「ど、どこ行くんのだ？」

「図書館」

やっぱりそうか。

「おい、ちよつと歩くの速いつて！」

すると長門は歩く速度を緩めた。

「んじゃ、テキトーに見とくか。」

私はそう言っつて館内に足を踏み入れた。

長門はさっさとどこかへ消えていった。

数十分たち、もうそろそろ戻らなくてはいけない時間になり、私は本をしまい、長門を探すことにした。

キヨロキヨロしつつ、長門を探していると・・・

「ねえー！そこのお嬢ちゃん。」

「・・・？なんですか？」

後ろから声をかけられて私は振り向いた。

そこには男の人が立っていた。

（その2に続く）

キヨン子

「おい！」

作者

「なんだい？」

キヨン子

「なんでこんなに中途半端な所で続くになってんだよ！気分れにもほどがあるっつーの！読者様に失礼だろ！」

作者

「いや…だってサー…読者様は早く最新した物がみたいだろうし自分も今日1日でこんなに書いたからちよつとキツいんだけど。最初パソコンで書いてたのに弟が使うせいで今ケータイでやってるぐらいなんだけど。偉いと思わない？普通パソコン部屋追い出されたら書く気無くすよね普通」

キヨン子

「確かにお前も通院の後なのによくやったな。いつもなら疲れて次の日の朝まで爆睡してんのかな。休みの日くらいちゃんとやっつたつうことは許してあげて下さい。このバカ作者はいつも家から二時間以上かかる病院に月一で通院してんですよ。本来なら昨日の祝日にこれをやるつもりだったらしいけど学校の校外学習でできなかつたんですよ。それで学校の振替休日の今日やってたんですよ。許してあげて下さい。」

作者

「そうですね！本当はだから今日丸一日かけて番外編終わらすつもりだったのにさ…なんで通院しなきゃなんねーの…」

キヨン子

「お前が軟弱だから」

作者

「酷い！」

キヨン子

「お前が早く治せばいいの。治せば半日も時間潰さなくてすむの。わかった？」

作者

「はぁーい…」

キヨン子

「読者様には本当に申し訳ないと思いますがこのバカ作者は貧弱で臆病な人間として最悪な奴です。『しょーがねーな』と言いなから許してあげて下さい。」

作者

「ってことなので近々番外編の続編仕上げようと思いますので是非見て下さいね！」

続編にはちゃんとハルヒコ出てきますので。あと長門の続きも書きますから。あれ？これじゃあ古泉陰薄くね？

でも自分はGL書けないのでご了承下さいね。古泉どうやって出そうかな…」

キヨン子

「おい作者。無駄なこと考えんな」

作者

「では続編をお楽しみに〜！」

番外編PART1：キヨソ子の動悸その1：（後書き）

じつはあの雑談の内容全て事実ですよ。ここまで読んで下ってあげてくださいました。感想や評価、メッセージ、よろしければください！作者は本当にバカなので最新が早くなりますよ！次回もお楽しみに！

番外編PART1：キヨソ子の動悸その2：
(前書き)

雑談は読み飛ばして下さって結構です

番外編PART1：キヨソンの動悸その2：

作者「では、番外編＜暴走編＞第一回の続きを始めましょうー！」

キヨソ子「はいはい、早く始めてよね。」

作者「実は拙者、ある重大な発見をしたであります！」

キヨソ子「なぜに拙者？」

作者「忍者みたいな発見したからであります！隊長！」

キヨソ子「なんで私が隊長？・・・まあいいや、何？その発見。く

だらなかつたらこれから小説の最新を二時間に一回すること」

作者「いくらなんでもそれはキヨソ子の頼みでも無理。授業中に書

かなくちゃいけないし先生に目付けられたくないし。」

キヨソ子「やっぱり駄目か・・・」

作者「いい加減にしないと永遠にシカトしますよ。拙者、そんなに

気が長いとちやいますから。それともそんなにこの作者怒らせてー

のか？あ？そんなら上等じゃねーかー！！」

キヨソ子「あ、キレた」

作者「てめーがそんな事言ったから自重しようかと思っただけだしな

い！」

寸止めにしてやる！！寸止め以上してやるとこの俺様が壊れるから

やんねーけど壊れなかつたらそのままキヨソ子壊す！」

キヨソ子「・・・嫌な予感が・・・っていうかなんだよ俺様って」

作者「いいじゃんここでは俺の本当の性格知ってるやついないに近

いし」

キヨソ子「まずそいつに全力で謝ってこい。いないわけじゃないん

だから」

作者「まあだいじょーぶっしょ」

キヨソ子「かわいそ」

作者「ってことで俺の堪忍袋の尾が切れる前に番外編入るぞ」

キヨソ子「（うわー作者のキャラ崩壊・・・）はいはい・・・」

作者「で、重大な発見っていうのはキヨンジのほうかキヨンよりその話の地の文が好評って事です。アクセス数が完璧にキヨンジの方が多いんですよ。」
では、番外編の続きお楽しみください！」

く長門編続きく

「えつと・・・？」

まず、私は図書館で声をかけられたが、相手の返事がない。

・・・?????

私が踵を返そうとすると

「お譲ちゃん」

まただ。

さつきからこんな感じで困っている私。

相手はなんか携帯電話いじっているけど私が行くことになると「お譲ちゃん」と言っって呼び止める。

この人は何がしたいのだろうか・・・？

・・・もしかして困っている私を楽しんでいるとか・・・？

でもその人は図書館内なのに携帯電話をいじり私には関心が無いように・・・

ってというか図書館って電波届きにくいんじゃない・・・？

・・・本当に何なんだろう・・・？

「あ・・・あの、私行かなくちゃいけないんですけど・・・」

「・・・。。。」

ヤバイ・・・痛すぎて涙が・・・
声もあげられないってどういうこと！？
いやお願いですから助けてって！！
冗談抜きでマジ痛いんだって！！
片手なのになんでこんなに痛いんですか！？
信じられませんよ。
ってか今日に限ってなんでこんなに来館者少ないの！？
今私がいる位置はカウンターからほど遠いし・・・
ヘルプミー・・・

私の意識はどんどん薄れていった・・・

「テキトーに小娘を連れて行くなんて、なんて楽な仕事なんだ。コイツ、簡単に気絶しちゃったじゃねーか」
へへ、と笑いながらその男は言った。
「じゃ、テキトーに担いでアジトに持っていか」
男はそうニヤニヤしながら言った。
そのとき

「なにをしている」

凜とした声が男の耳に届いた。

「あ？なんだよ。テメーには関係ねーだろ？」

「関係なくはない」

「あ、もしかしてこの女の男か？・・・だとしたら諦めな。こいつ気絶してるから」

「諦めるもなにもまずは彼女からあなたを離れさせる。」

「へっ。オメーみたいなほっそい奴に言われたか。俺もなめられた

もんだな」

「彼女にとって、あなたは彼女を害するもの。だから除去するのみ」
「いつまで、そんな口叩けるかな！」

男はその少年に飛び掛った。

スルリと少年はその攻撃をよけた。

「このっ」

男は右足で少年を蹴りかけた。

「!？」

すると少年はその足を素手でつかみ動けなくなった男の腹にそのまま自分の左足をおとした。

「ブツ」

男は苦しそうに唾を吐いた。

「あなたは鉄砲玉なのだから相手の情報を確保するのみがやること。
一般民に被害を与えることは許されないはず」

「・・・！何故そのことを・・・！」

「生きて帰りたいならここから出て行くべき。」

「負けて帰るぐらいなら死んだほうがマシだ！親分に合わせる顔が
ねえ！」

「いますぐここから立ち去れ。」

「俺が帰る場所がねえじゃねえか！」

「・・・今すぐ失せろ」

「ひいつ」

その少年には妙な威圧感があった。

「っち！月夜の晩だけだとおもうなよ！」

そう捨て言葉を残し、男は去っていった。

「・・・ふう・・・」

少年はため息をついた。

「・・・。」

横たわるポニーテールの少女を見て本当に僅かだが頬が緩んだ。

「あなたは僕が護るから」
少年はそう呟き、その少女を抱えた。

「……ん……？」

「起きた？」

私はぼんやりしながら目を開けた。

「おう……」

私はボーっとしながらなんとなく答えた。

なんだか誰かにおぶわれているような

なんだか長門の顔が近いような……

……ん？ん？

……。

「うわーっ！！」

ちよちよちよちよちよちよちよちよちよ……

「どうしたの？」

「いや、そのな、な……」

長門におぶわれてるし！！

「あなたは相当疲れているはずだから着くまでこのままの法が良い。」

「お……おう……」

私は火照った顔を誰にもばれないように長門の背中に顔をうずめた。

心臓の音は寝起きなのにすごく高まっついて

私は誰にも気付かれませんがようと願っただけだった。

くまたまた雑談。番外編重視のかた、及び作者が出るなんて考えられない方、作者が嫌いな方は読み飛ばしてくださいく

作者「はいはいおわったーあとは肝心のハルヒコだけだ！」

キヨン子「最初は二つにわけると言っておいてまたこれかよ・・・」
作者「ぶつちやけ長門書きたかっただけだし。ハルヒコとみつるは
おまけだし」

キヨン子「・・・最悪な作者だなあおい・・・」
作者

「それでもこんなになっちゃったよ・・・」

あー…なんかもうヤバいかも。

こんなに読んで下さる方がいるのに作者がこんなにグダグダじゃダ
メだよな・・・」

キヨン子

「何急にネガティブになってんの？」

作者

「はい！切り替えよう！」

キヨン子

「お前がそうやったんだろ」

作者

「次はハルヒコが出るけど、どう？」

キヨン子

「どうって…別に何とも」

作者

「はいじゃあはっちやけちやおう！」

影が薄い古泉も出そうか」

キヨン子

「古泉って本当に哀れだよ…前に長門が性転換人物を言ってる
と
き忘れてたもんな」

作者

「今は修正してるから大丈夫。」

キヨン子

「二回もしたけどな」

作者

「あはは」

キヨン子

「うわー」

作者

「ではでは、ハルヒコ編も近々出すつもりなので、是非見て下さいね！」

キヨン子

「じゃあ、また」

番外編PART1：キヨソ子の動悸その3：（前書き）

番外編PART1最後です！

番外編PART1：キヨソ子の動悸その3：

「作者とキヨソ子の恒例(?)の雑談です。番外編を早く読みたい方、性転換が苦手な方、「キヨソ子は俺の嫁」の方、作者とキヨソ子が話してほしくない方、作者はツッコミ役固定だと思っっている方、作者が嫌いな方、「そもそも作者と物語の中の人物が喋るなんてバカじゃないの?」と思っっている方、その他諸々に当てはまる方は読み飛ばして下さい」

作者「やっとこの回の番外編も最後になりました！」

当初一回で済ませる予定だった番外編も三回もやってしまうという予定外なことになってしまったことをまず謝ります。すみませんでした。」

キヨソ子「一番最初の雑談の後半のせいで読者様に多大な(いや、そんなことないだろうけど。ちょっと大袈裟すぎないか?)心配をして下さいったことにもね。」

事実だけど大したことないしな」

作者「まあ、そうなんだよね。事実だけど大したことないんだよね」キヨソ子「ってというか最初の注意の文長くなってる気がするのは私だけ?」

作者「いやしようがないよ…。この雑談をよく思っっていない人がいるかもしれないから一応書いておかないと。作者は結構本編より楽しくて好きなだけどさ」

キヨソ子「ちゃんと仕事しろよ」

作者「だってさーさすがにそんなに拙者真面目な人間じゃないしね。こうグダグダの方が気が楽でいいよ。」

ちゃんと注意書きしてるし。ここまで読んでるってことはその注意書きを無視してでもこの雑談を見てやってもいいよって方であるはずだし。」

キョン子「お前、人間として最悪だった」

作者「なんとも言う方がいいさ。本当のことしか言っていないし」
キョン子「まあ確かにな」

作者「拙者の作者友達がこの雑談を大爆笑しながら見てるとかその友達の妹が『小説家になろう』を『小児科になろう』と勘違いしたとか」

キョン子「……………それマジか…？」

作者「マジマジ。事実だけど」

キョン子「お前に友達っていたのか」

作者「……………さすがにそれ酷いよ…作者に1000のダメージ!!（しかもツッコむところがそこ?）」

キョン子「そう言ったら本気のことでも冗談に聞こえるって」

作者「……………いいじゃん。やりたいんだから」

キョン子「我が儘過ぎ」

作者「いいじゃん。いつも我慢してるから」

キョン子「……………それどういう意味？」

作者「そのままの意味ですが何か」

キョン子「……………。（いつも物語で自重してないのはどこのどいつだ!!）」

作者「えー…つと、さすがに雑談も長過ぎるので本編入ろうか」

キョン子「はいはい…」

作者「では、少しだけですが、お楽しみ下さい!」

作者「ねえキョン子」

キョン子「……………何？」

作者「これ終わったら、キャラ全員揃うんだけど、拙者の我が儘でキャラの人気投票したい」

キョン子「もうちょっと本編進めたら、ね（しかもこれ二次創作だから勝手にやっついていいわけないし）」

作者「むー……」
キヨン子「だから早く番外編入るぞ」

作者「でも参加して下さいさる方いるよね!？」
そうだ!

評価でも感想でもメッセージにでもなんでもいいので、好きな暴走編の中のキャラを書いて下さい!

ついでにこの物語の感想とか『もっとキヨン子出して!』などのことでも構いませんので書いて下さると嬉しいです。

他にも『キヨン子にメイド服装してみたい!』や、『このキャラのこういう夢小説が読みたい!』などでも結構です!

これ書いて下さったら多分本当に作者は、やります。
ですのでお願いします!

長文失礼しました!

<キヨン子の動悸〜涼宮ハルヒコ編〜>

私は、長門におぶわられて集合場所の300メートルぐらい前まで来た。

すると長門は立ち止まり、私の方を見た。

「ここから歩いてほしい。」

涼宮ハルヒコにはれないように「

「あ、そ、そうだな」

長門は私が降りやすいようにしゃがんでくれた。

「あ、ありがとな」

私はぎこちなく笑った。

あー、なんで私ってこういうときに朝比奈先輩みたいになつこりと微笑めたらどれほどいいのだろう。

私はそう思いながらも足を進み始めた。

「キヨ・ン・子!!」

「すまん！ハルヒコ！別にわざとじゃないんだ！」

「わざとだったら、俺も怒るからな・・・まあ、いい。早くクジひけよ」

ハルヒコは不機嫌な顔でクジを出した。

「じゃあ、次は俺とキヨン子と古泉さん、有紀とみつるな。」

ハルヒコはそう言い、ズンズンと歩き始めた。

「それではキヨン子さん、行きましようか」

古泉がスマイル100円つて感じの笑みを浮かべこっちを向いた。

「ああ。」

私も歩くことにした。

「キヨン子さん、涼宮君がどうしてあんなに不機嫌かわかりますか？」

「は？知るかよ。ただ単に今自分が抱いているイライラを私のせいにしていただけじゃないか？」

私はその質問に率直に答えた。

「だってそれ以外に考えられないじゃないか。」

「まあ、確かにそれもありますけど・・・一番そのイライラの原因はあなただと、私は思うのですよ」

「・・・はあ？私？何か私ハルヒコにしたか？」

「・・・本当にあなたは鈍いですね。涼宮君に同情したくなります。」

「どうしてだよ！？私の方が絶対哀れだって！」

「・・・はあ・・・そうですか・・・あ、」

すると古泉の持っている鞆が微かに動いていた。

古泉は鞆からケータイを出し、ケータイの液晶画面を見た。

「あ、どうやら機関からの呼び出しのようです。では、後はお願いします」

「え、ちょ、は？」

「ちなみに、涼宮君のイライラの原因があなたな理由はですね・・・涼宮君があなたをどう思っているか、ということに繋がるといって、とですからね」

「はあ!？」

古泉はそう意味深なことを言って去って行った。

「・・・な、何なんだ・・・」

私はそうこぼした。

「ん？あれ？古泉さんは？」

「あ、なんかバイトだってさ」

「なら、団長である俺になんて言わないんだ？・・・まあ、いいか。よっぽど急用なことだったんだな」

ハルヒコは納得したようにまた前を向いた。

「・・・ハルヒコが私をどう思っている、か。

「なあ、ハルヒコ」

「何だよ」

「お前って私のことどう思う？」

「はあ!？なんだよいきなり意味わかんねーよ!」
なぜそこで焦る。

「お、お前はた、ただのSOS団の平団員だよ!何か文句あるか!」

いや、別にないけど・・・

っていうかなぜそこで顔を真っ赤にする必要がある。

「じゃ、じゃあお前は何で聞いたんだよ」

ハルヒコは急に振り返りそう言った。

しかも相当真面目な顔で。

「べ、別、別に、なんとなく」

「そうかよ」

ハルヒコはふてくされたように前を向いた。

・・・?

なんなんだ・・・?

「・・・じゃあ、お前は、さ」

ハルヒコは再びこつちを向いた。

「俺のこと、どう思う?」

・・・ハルヒコのこと・・・?

んなの考えたことなんて無い。

古泉にとつちや神だし長門にとつちや観察対象だし朝比奈先輩にとつては空間の歪みの中心。

・・・私にとつて・・・?

悩んでいる私を、真剣にハルヒコは赤くなりながら見つめている。

そんな顔で見られたら・・・困るでしょ・・・

ただでさえ綺麗な顔なのに・・・

こんな状態なのになぜか私の鼓動は早くなっている。

・・・あーもう意味わかんない!!

私にとつて?は?何で?

わかるわけないって!

ぐるぐる。

ぐるぐる。

私の頭の中はこれでもか、というほど困惑していて意味わかんない。

「・・・はあーっ・・・」

ハルヒコは私を見て大きなため息をついた。

「・・・まあ、確かにわかんないか・・・」

ハルヒコは悲しいような嬉しいような複雑な顔を私に向けた。

そして私の頭をわしゃわしゃとかき混ぜ始めた。

「!?!は、ハルヒコ!?やめてよ」

「やだ。」

するとさらに私の頭をかき混ぜた。

「ち、ちよつとやめろ！」

するとさすがにハルヒコもやめた。

「…まだ答えは聞かない。けどいつか、答えてくれよな」

ハルヒコは悲しげで優しい目を私に向ける。

……恥ずかしいと思ったらありやしない！

ハルヒコも焦って前を向いて

「は、早く見つけないと！」

と言って足を速めた。

「ち、ちよつと速いって！」

私は顔が赤いのを冷まさせるように走った。

（またまたまた雑談。（以下略）いやな方は最後の方まで飛ばして下さい。最後の方はとりあえず読んでください！）

作者

「やつと終わった！ハルヒコ編！」

キヨン子

「作者、あんた私の寿命縮める気！？」

作者

「んなことないよ。」

キヨン子

「……」

作者

「でも番外編終わったら雑談書けないじゃん。あー失敗だー！」

キヨン子

「なんでそんなに悔しがってんの…」

作者

「まあそれは置いておいて。っていうかその2書いた後のアクセス数ハンパないねえ……。1日で10000いっちゃったよ……」

キヨン子「こんな作者にはもったいないね。番外編そんなに好評だったのか？」

作者「なんと総アクセス数が9000超えちゃいましたし！。実は『次の番外編は5000の次は10000だっ！』って決めてたんだけど……さすがにこうなるとは思ってなかったし……」

キヨン子「まあ確かに予想外だね。今までこんなにアクセス数増えたことなかったし」

作者「番外編終わったら他の連載中のやつ進めるつもりだしさ……っていうか本当にこんな物語にこんなにきていいはずないよね！？

何か他の方の小説と間違ってるないよね！？」

キヨン子「間違ってたらずぐUターンだね」

作者「……確かに……」

キヨン子「まあそれだけ期待されてるっていうことだからお前も頑張れよ」

作者「言われなくても頑張ってますが！？」

キヨン子「今まで以上に」

作者「……はい……頑張りますよ……」

キヨン子「っていうか本当にキャラ人気投票するの？」

作者「俺はやる気満々ですが？」

キヨン子「……」。」

作者「やっぱり募集かけようぜ！キヨン子もそんな顔すんなって！ちゃんと本編進めるからさ！

ちゃんと発表も本編もって書いてからにしますから！お願いしますよ！

「

キヨン子「……勝手にして……」

作者「え！？いいの！やったーっ！」

キヨン子「作者の方、原作ファンの方、出版社の方、本当にすいま

せん……」

作者「あ、もちろん募集するのはキョン子達の方ですよ！有希ってもらっても意味ないですよ」

キョン子「はあ……早く募集言って……」

作者「二回目になりますますがまた言います！

好きなキャラを教えて下さい！

そして『このキャラにこんなことしてほしい！』や、『このキャラの夢小説が読みたい！』なども募集します！

ついでにこの物語の感想も書いて下さると嬉しいです！

きっと作者はやりますのでお願いします！」

キョン子「できれば多くの方々にしてほしいです。今まで評価や感想、メッセージをしたことがない方もやって下さると嬉しいです。

あ、今までやったことある方も大歓迎ですよ」

作者「では、応募は感想や評価、メッセージのところからお願いします！」

キョン子「沢山の応募、お待ちしております！」

番外編PART1：キヨソ子の動悸その3… (後書き)

ご応募お待ちしております！

前回のお詫び

〜前回のお詫び〜

このたびは、この物語を読んでくださってありがとうございます。前回の人気投票は読者様の多大なる怒りになつてゐることを知り、誠に申し訳ないと思つています。

真面目に本編を進めて、皆さんからちゃんと投票ができるくらいに進めないと投票なんてできるわけないですもんね。

作者は何故かそういう単純なことにも気付かず、走つてしまいました。

確かにこれを他の方の作品と思つていたら：悪のりしそうですが仕舞いに逆ギレして「こんな全然進めてない小説の投票なんてできるか！」と言つて放置しそうです。

そう思い、話とは別にこの文を投稿させていただくことになりました。

これは全て作者の考え不足です。ずっと昔からやりたかつたため我慢がきつとできなかつたのでしよう。

心からお詫び申し上げます。

これのお詫びに投稿を自重させようかと思いましたが、読者様が求めていることは本編を進めることです。

なのでもちろん番外編は自重いたしますが本編は進めさせていただきます。

ですが、もし応募があつた場合は、しばらく本編を執筆させていた

なから発表させていただきます。

なかつたとしても、しばらく本編を投稿させていただいてから募集をさせていただきます。

こんなとてもダメダメな作者で本当にすいません。

心から恥じています。

これからもまだ未熟者でしょうがない人間ですがこの物語をよろしくお願いいたします。

そしてキヨ子達をよろしくお願いいたします。

第四話・傷口に塩とからしとマヨネーズ : (前書き)

もちろん本編です。

第四話：傷口に塩とからしとマヨネーズ：

「と、いうか、なんでハルヒコ達がこんな世界を作ったきつかけがわからないんだよね……」

ダブル古泉が来てから、二人に現状を説明したときにポツリとキヨ子は言った。

「え？ そうなのか？」

俺は思わないそう口走ってしまった。

「そうに決まってる！ だって今まで通り昨日は学校はあったし、普通に終わった！」

キヨ子はそう断言した。

「……でも、俺は……」

俺は昨日の出来事を話した。（第一話参照）

「……でも、私そんなこと言った覚え、ないぞ？
ハルヒコが似たようなこと言っていた気はするけど……」

俺が話し終わると、キヨ子はそう言った。

「……こういうときは困ったときの長門さんだな。」

俺はダブル長門を見た。

「……そのことについてはまったくもって不明。」

「……これは、有り得ないことに近い。」

普通この二つの世界は平行しているはずだから

「……だよな……」

「……ここに、何故平行世界なはずなのに違うことが起きているのか……」

「……ここにも空間の歪みがあるのではありませんか？」

ちなみに今のセリフを言ったのはダブル朝比奈さん&古泉だ。

なんでこんなに見事に八モるかね…

「っていうことは、この事件の発端は、あんただったのか!？」

キヨン子が出来れば言っただけ欲しくなかったことをなんともストレー
トに言った。

今の俺の心情をわかりやすくすると…

グサツ！（何か矢みたいなのが当たる）

『……グホツ……』（俺がそう言う）

そんな感じだ。

視線が痛い。

「そんなことより、まずは、この歪みをどうするかが大切だと思います」

古泉、ナイスフォロー…

謎が増えた上に二人をもとの世界に戻りたいと、思わせないといけ
ないのか…

ハルヒ、今回も大変なことになりそうだぞ。

……と、というか何故二人はこんなに遅いのだろうか。

俺はとても嫌な予感がした。

第四話・傷口に塩とからしとマヨネーズ : (後書き)

謎は深まるばかり…。次回もお楽しみに！ここまで読んでくださって、ありがとうございます！

第五話：なかなか来ない人：（前書き）

最新遅れてすみません！別にフエイントかけたかったわけではあり
ません。決して。

第五話：なかなか来ない人：

私の性転換バージョン、つまりキヨンが言ったことと、私が言ったことが違ったお陰&言ったことの内容で出来てしまったらしい。この世界は。

そもそも、何故同じことしか考えないはずの私たちが何故違うことを言ったのか。

…………… 本当に意味がわからない。

こういうときにハルヒコが早く来ないのが嬉しいような嬉しくないような。

もしすぐに来たら少なくとも今日の放課後はそのことについて触れなくて済むし、来なかったら今みたいに堂々とそのことについて喋れる。

…………… でも、さすがに来るのが遅すぎる。

ケータイで呼び出すか。

私は鞆からケータイを取り出した。

「二人共、どうしたんですか？」

するとダブル朝比奈先輩からそう聞かれた。

キヨンも同じことをしたらしい。当然だが。

「ハルヒコに今何やってるか聞くんですよ」

「ハルヒに今何やってるか聞くんですよ」

本当はハモってるのだが、『ハルヒコ』と『ハルヒ』だと難しいのでこういう表示になってしまった。
すまん。

3コールぐらいでハルヒコは出た。

『…………… なんだよ、キヨン子』

「それはこっちのセリフだ。今お前何やってんだよ」

『…………… 別にいいだろ。たまには』

よくない。断じてよくない。

いつもなら直ぐに来るのに、しかも『休むなら、絶対俺に連絡すること！。これは絶対に守れよ！』とか言ってる張本人がロクに連絡もよこさずにこんな時間まで部屋に来ないのはどうかと思う。心配するだろ。誰だって。

『……………つ……………わ、悪かったな！ちよつと熱っぽくて先に家に帰ってた』

朝までそんなに悪そうには見えなかったけど…今の声はなんだかいつものハルヒコと比べて違ったからきつとそうなんだろう。しょうがない。

「これから、先に帰るなら連絡するように、な？」

『……………悪かった。』

「今日はゆっくり病人らしく休むんだぞ。」

うっかりこじらせないようにな。団長として、休養も大切だ。

『……………おう。』

「じゃあ、おやすみ」

『おやすみ』

私はハルヒコが切ったのを確認してから切った。

「……………どうでしたか？」

「ハルヒコはなんだか熱っぽいらしい。」

「こっちもだ。いつもと違ったしな」

どうやらハルヒの方もそうらしい。

「今、情報統合思念体と通信した結果、二人共急激な環境変化についていけずにいる」

新しく学校に入ったときの数週間疲れる感じか。

「そう」

ハルヒが疲れること自体、はっきり言って理解しがたいが。

……………ちよつと待った。

だとしたら引つかかる。

そういうことなら、ハルヒコも前の世界の記憶があるというのか。

「そう」

だったら私たちもハルヒコと同じように疲れるはずだ。

なのに、そんな急な疲れはない。

……………一体、どうなっているんだ。

この世界は。

第五話：なかなか来ない人：（後書き）

謎が話数ごとに深まっていきます。ここまで読んで下さってありがとうございます。実は作者、あと2日で中間テストというピンチに立たされております。頑張ります。

第六話・起きたたらそこには… (前書き)

最新遅れてすみません！

早く最新してほしいと思っていた方、本当にすみません！

第六話：起きたたらそこには：

私は家に帰った後、私は風呂に入り、夕飯を食べて、さっさと寝た。

……はず。

おいまて。

何故、何故私は今ここにいる。

誰か説明してくれ。

実は今、懐かしいあの閉鎖空間（もちろん佐々木のでは無い）に私はいた。

いつの間にか。

さっきまで私はベッドの中に潜っていたはずだ。

それで急に閉鎖空間。

いつしかのハルヒコといた時みたいに頭を地面に叩きつけられて起きたわけでもなく、起きたら目の前にハルヒコの面が^{つら}あったわけでもない。

辺りを見回してもハルヒコの姿は見つからない。

……何が起こってる？

閉鎖空間と言っても前に古泉に連れて行かせられたあの場所ではなく我が北高の敷地内。

だからハルヒコがいる……と感じてしまった私：

前からのパターンから見てこの閉鎖空間には私以外の誰かがいる。間違いない。

そうでもしないと私はこの閉鎖空間から出られないからなもしいなかったとしても脱出する術がどこかにある。

例えばあの文芸部室兼SOS団アジトにあるパソコンから長門と通信出来るのかな。

……そうだ。部室だ。

きっと部室には何かある。

何故かわからないけど私の今までの経験が物語ってる。

私は立ち上がり、学校内部へと入ろうと歩みを進めた。

キーーーーーッ

今までそんな感じなかった音が今、ここに私以外誰もいないからよく聞こえる。

ボタン、とドアを閉めて私はコンピ研か例の勝負でとった(と、いうかなんというか……)ノートパソコンを起動させた。

……!?

な、なんだよこれ!!

私は我が目を疑った。

理由は簡単だ。

ハルヒコが、パソコンの液晶画面にいたからだ。

第六話：起きたたらそこには：（後書き）

なんと閉鎖空間に送り込まれたキヨン子！

そして何故か液晶画面にいるハルヒコ！

次回はどうなるのでしょうか？

次回をお楽しみに！

そして！

なんと、ユニークアクセスが、

9000を超えていました・・・！

こんな駄文がこんなにも読まれているなんて・・・！

みなさん、本当にありがとうございます！

そしてこれからもよろしく願います！

第七話：無題

ハルヒコがパソコンのディスプレイにいる。

紛れも無くこいつはハルヒコだ。

しかもハルヒコがちっちゃくどこぞのキャラクターのようになっ
ちまちまと画面中を歩き回っている。

なんというか、私も女だからとりあえずこついうものをみると・・・

「か、かわいい・・・」

「おい！キョン子！一体どうなっているんだよ！」

「う、うわっ!？」

私がつい本音を口に出すとノートパソコンからいつものハルヒコの
声が聞こえた。

「う、うわ!？」じゃねーよ！なんかさっきまで面白そうだと思
って色々見て回ったが、ここなんにもねーよ！」

それは面白いものがあると高望みしたから見つからないんじゃない
のか？

私がそう思った時、

「・・・な、なんだよ」

急にハルヒコがじーっと見てきた。

「え？な、なんか顔に付いてるか？」

「・・・。。。」

「そそんな風にされたって困るぞ？は、ハルヒコ、お前は何を・・・

私が続きの言葉を言おうとしたとき、

カッ！

っとパソコンのディスプレイが強い光を放った。
私は眩しくて、目を閉じてしまった・・・

「え？キョン子さんとキョン君も涼宮君と涼宮さんも今日休みなんですか？」

ハルヒコが学校からすぐに帰った次の日。

文芸部部室（sos団本部）には長門、朝比奈、古泉のそれぞれ二人ずつしかいなかった。

「そう」

「涼宮さんたちは昨日風邪っぽかったからともかくキョン君たちは一体どうしたのでしょうか・・・」

「・・・現在統合思念体が調べているが未だに不明」

長門有希がそう言った途端、

二つのケータイが鳴った。

「……あ、今閉鎖空間が発生したと機関から連絡が……っ!？」
「……こ、これは……!？」

ダブル古泉がケータイを取り出し、画面を見た途端、二人は困惑顔になった。

「……ど、どうしたんですか!？」

ダブル朝比奈が声をそろえて言ったと同時に

「……っ!？」

ダブル長門も古泉たちと似たような顔になった。

「……これは相当危ないようですね……」

「僕達で処理できるか不明。」

「い、一体なにがあつたんですかあっ!？」

「僕たちにも教えてください!！」

「閉鎖空間の場所が特定できません。」

第七話：無題（後書き）

最新おくれてすみません！

待ってくださったかたがおらっしゃいましたら本当にすみません！

これからもっと早く最新できるようにがんばります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5113g/>

涼宮ハルヒ×涼宮ハルヒコの暴走

2010年10月10日20時58分発行